

魚雷攻撃で船とともに去ってゆく戦友を目の前にし、不安は募るばかりです。

幸運にも私たちの乗った船は難を逃れ、目的地にたどり着き、久し振りに笑顔が戻りました。到着地も沖繩と知らされ、はじめて見る光景もすべてが珍しいもの。部隊名も沖繩派遣軍混成駒一三〇六四部隊となり、国土防衛の任務。

相変わらず警戒陣地構築が続くか、宮古島方面に敵艦船が接近の情報で、沖繩を離れ宮古島防衛へ。早速、変わることのない陣地構築。海岸線は珊瑚礁でできた硬い岩肌で形成され、作業もはかどらず、いらだつばかりの土木作業員同様の毎日。当初、島内も比較的平穏で、時折、空襲を受ける程度。それも束の間、日を追うごとに空襲は激しくなり、

攻撃目標も陣地、民家を問わず無差別になり、恐怖も増すばかり。

敵機への対空砲火は、貧弱なものでいかんともしがたく、敵機のなすがままの行動をただぼう然と見守るだけ。し烈な空爆に加え、敵艦船接近と伝えられ、宮古島の守備隊に対し「天一号作戦命令」となり、死守との大本営の命を受けました。全員玉砕を合言葉に時を待ち、各自が恩賜（おんし）の酒、たばこを拝受。今も思い出される菊の御紋の輝きでした。

同島駐屯中の食事は粗食の限りで、思い出すだけでも、よく激務に耐えられたものだと不思議に思えてなりません。毎食事はさつまいも三から四個、それにみそ汁一杯で腹ペコ状態。空腹を満たすため、手当たり次第に食べられそうなすべての野

草、島内に生息するあらゆる小動物なども口にしました。

当時の食生活を振り返り、ただ驚嘆の限りです。これらの食事で、空腹は満たされるものの、下痢、腹痛など当たり前。戦友のなかには衰弱が極限に達し、併せて島特有の悪性マラリアの高熱に苦しみながら戦病死する友も多くいました。哀惜の言葉もなく、遺体も故郷の土を見ず、異郷の土と化して安らかな永遠の眠りにつきました。

沖繩は、連合国軍の進攻から短期間で全滅状態。宮古島も損害が大きく、昭和二十年六月に全面降伏し、即刻、武装解除。各集積場に持ち込まれた兵器、弾薬の鉄くず同然の眺めは、見るに忍びなく、目をそらしました。

終戦でアメリカ軍監視の下、戦後